

(二) 士官学校

亡命を認められたグレーチエンとベンドリングが落ち着いたのは、ハイネセン記念大学のキャンパスにほど近い、かつては学生向けの安価な下宿だったテラスハウスである。古いことは古いにしても建物そのものは十分に堅牢で、その後の補修も入っている。最大八人の学生が起居を共にしていただけあって、広さにも文句はなかった。郊外より広大な邸宅も落ち着き先としての候補に入っていたのだが、グレーチエンの一言で沙汰やみになった。

「父上も母上も……誰もおられない。私とそなたが二人で住むのに、広すぎる家はかえって……」

グレーチエンはちよつと眉を寄せ、まだ不十分な同盟公用語の語彙を嘆いてから、母国語で「間が持たない」と付け加えた。意を察して、ベンドリングはその邸宅を候補から外すことに同意した。人によって埋められることのない空間が、グレーチエンに亡き両親や、帝都での暮らしを思い起こさせるとすれば、後見人の彼が我意を通す謂われもないというものである。

ハイネセン記念大学には同盟全体から学生が集まってくる。閉鎖的な高級住宅街よりも、彼らのような亡命者に向けられる忌避の視線は少ない。あくまで比較の問題であるにしても。

同盟首都の一面に落ち着いて直ぐ、グレーチエンはベンドリングに向かって同盟軍士官を志すことを宣言した。

士官学校は四年制であり、入学を許可される年齢は一五歳から二〇歳までの同盟市民の男女である。同盟軍士官としての身体能力と同時に、大学レベルの教育内容を受講可能な知的能力が要求される点、教育制度上の扱いは大学と同等である。身体能力云々は別としても、要求される知的能力のレベルは極めて高く、あまた存在する同盟の大学教育機関の中でもトップクラスとされ、入

学の際しての競争率も高い水準を維持している。ただし、後にヤン艦隊の幕僚として知られるアレックス・キャゼルヌや、ダスティ・アッテンボローのように、士官学校を「滑り止め」に受験する「不届き者」……熱狂的な同盟の愛国者に言わせれば……も、確かに少数ながら存在はする。

同盟での市民登録記録上は入学時には一五歳になるとは言え、実年齢としてはやつと一四歳の誕生日を一ヶ月先に控えたばかりの、実年齢一歳で帝国から亡命して来てわずか三年余りの少女にとつて、まずは超難関といつて良い学校だった。

「あと二年で、実年齢も一六歳になられる。公的には一七歳です。入学者の平均年齢は一七歳を少し超えるようですから、それでも随分と早いと思います」

ヘルクスハイマー伯の資産は、彼女に安楽な半生を保証するに足りたのだが、グレーチエンはそうしたためるま湯の中に自身を浸してしまふことを明確に拒否した。その後、彼女の生活は、同盟公用語の習得と、士官学校入学のための学力と体力の獲得に、そのすべての時間を費やしていたと言つて良い。今も、頬に血の気が薄く、どことなく曇れた雰囲気身をまとっているのも、そうした無理な生活を続けているせいだった。もう二年くらい準備に時間をかければどうか……グレーチエンの保護者であるベンドリングはそう勧めたのだ。

「そなたの言うことは正しいと思う。その方が合格の可能性も高いだらうし」

まだ微かに帝国公用語の堅苦しい発音の名残を残しながらも、応じるグレーチエンの言葉は十分に流暢な同盟公用語だった。一刻も早く言葉に馴れるために、二人の間で言葉を交わす時でも同盟公用語を使う。これが彼らの間の約束事だった。ただし、ティーン・エイジャーになつたばかりのグレーチエンであつてみ

れば、母国語を忘れないための時間枠もまた別に必要ではあるのだが。

努力が常に正当な結果を約束するものではないのは確かだが、彼女の場合はそうした例には当てはまらないようだった。身長はまだそれほどではなかったが、明らかに成長期の伸張率を示し始めていたし、実年齢を勘案すれば、女性としてはまずは長身に分類される段階にまで達しそうだった。幼い頃は仄かに翠色の色合いを帯びていた瞳は、今では混じりけのない紫水晶色に透き通っている。眸の光の強さを、柔らかくて丸みの強い頬のラインが和らげているので、彼女をよく知らない者の目には、まだ幼さを残した少女という印象が強い。

彼女が印象通りのあどけない少女というだけではないことを、ベンドリングは誰よりもよく知っていた。彼女の意志の固さを知る以上、彼にとつての同盟での毎日が彼女の意志を全うさせるためにこそあれ、彼女に無為な人生を歩ませる方向とは無関係なものとなったのも当然だった。

「でも機会があるなら試したいし、急ぎたい。急がないと間に合わない。そんな気がする」

士官学校の入学願書を表示させていた端末を切り替え、グレーチエンは別の記事を表示させた。

アスターテ宙域会戦を報じるニュース記事に、ベンドリングは小さく唸った。

ベンドリング自身は当初、グレーチエンの家宰のような立場に身を置こうとしたのだが、同盟軍は帝国軍統帥本部の情報将校であった彼を放置はしなかった。入国審査の際に示した意志の鞏さも預かって力があつたに違いないが、ハイネセンに定着して間もなく、彼にも同盟軍統合戦本部付きの情報士官としての地位を提示された。

自分には保護すべき人がいる……難色を示したベンドリングに、同盟軍は意外な柔軟さを示した。三年間は同盟軍大尉待遇での情報本部嘱託。その後はベンドリングの意思次第でそのまま嘱託待遇、あるいは正規の同盟軍大尉としての任官、いずれかの選択を許すとのオファーだった。裏を返せば、帝国の情報部将校である。最も危険な諜報要員ともなり得る人物を、そのまま野に放つほど同盟軍も甘くはないと言うところだっただろう。

ベンドリングは同盟軍の申し入れに応じ、今では同盟軍情報本部付きの大尉として勤務する立場にある。

「アスターテ宙域会戦は確かに戦術的には帝国軍に一步の優勢を許したかも知れないが、同盟軍の戦略的勝利は僅かほども揺るがない。我が軍将兵の決死の勇戦は、帝国軍のアスターテ星系制圧という戦略目標達成を阻止したからである。戦いの後に戦場に立っていた者が勝利者である以上、この会戦の勝利者が同盟と帝国のいずれであつたか、論を待つまでもないだろう」

無論、二人の視線を吸い寄せたのは記事の本文ではなく、帝国軍の指揮官の名前だった。曰く、ローエングラム伯爵ラインハルト上級大将。姓こそ変わっていたが、掲載されていた肖像写真は二人にとつて見間違えようもない。

「ミューゼル大佐……ですか」

「そう。三年の内に、五階級を駆け上がったわけか。一方、私はまだやっとこちらの市民登録で一五歳になるうところなのにな」

「ミューゼル大佐も軍での階級を得たのは一五歳の時であつたとか聞きますから。焦る必要はないでしょうに」

「一五歳でもう戦場に出ていた、ということだろう？あの時、彼は一六歳だった。一六歳でもう大佐……」

自分が同じことをできると自惚れているわけではないけれどね

グレイチエンはもう一度笑って見せた。

「彼に追いつきたいというのではなくて、早くしないと彼がさつさと宇宙そのものを変えてしまうような気がする。あと二年も待っていたら、何もかもが変わってしまうような気がして気が済まない」

「それは……」

「今、上級大将ということ、元帥になるのも直ぐだということだろう、ヴェンツェル・ハイブリッヒ？ 上級大将と元帥では、できることがまるで違う。確かミュンゼン大佐は帝国騎士だった。それが、ローエングラム伯爵家を嗣いでいる」

「確かにミュンゼン大佐……いえ、ローエングラム伯爵ですか。彼が帝国元帥の地位を得て、例えば帝国軍三長官の地位の一つを占めたとします。彼ならば、これまでの帝国軍の有り様を確かに大きく変えるでしょうが、宇宙そのものをすっかり変えてしまうほどのことをするとは……」

ベンドリングは言う。同盟政府がどう言い繕おうとも、アスターテは同盟軍の大敗北である。同盟軍でも歴戦の提督であったはずのパエッタ、ムーア、パストーレの三中将が完全に翻弄され、パエッタは負傷、ムーアとパストーレが戦死している。ラインハルト・フォン・ミュンゼン改めローエングラム伯ラインハルトの天才的な戦術手腕を示すものと言っている。ちなみに昨年の第三次ティアマト宙域会戦でのホルランド中将の戦死の際にも、帝国軍の指揮官の一人にミュンゼン大佐の名前が見えている。あるいは、ラインハルト・フォン・ローエングラムは、帝国軍に對するブルース・アッシュビーのような存在として同盟軍の前に立ちほだかるうとしているのかも知れない。

「しかし、それだけではありませんか？」
アッシュビーがどれほどの戦勝を重ねても、遂に同盟軍が帝国

領を侵すことはできなかった。ローエングラム伯もまた、ティアマトとアスターテで大勝を得たとしても、それを戦略的な勝利に生かす道を見出し得なかったではないか。ラインハルトが戦場で勝利を重ねたところで、現在の同盟と帝国の状況……何とかしたいが何とかならない……を決定的に覆せるとはとも思えない。

一五歳……実際には一四歳……の少女に對するには真剣すぎる口調になったベンドリングに、グレイチエンは笑みを消さなかったが、同意を示して頷こうともしなかった。

「それはそうかも知れない。でも、さっきも言っただろう。元帥と上級大将ではできることが違うと。今回、ローエングラム伯はアスターテで戦わされたのだ。でも、元帥になったら、今度は自分でどこで戦うかを決められる。これは大きな違いだと私は思うけれど、あなたは違うとは思わないのか？」

一瞬ぎよつとしてベンドリングは、無邪気そうな笑顔のままのグレイチエンを見詰めた。四年前、ラインハルト・フォン・ミュンゼンが示した鮮やかなまでの指揮能力が、鮮明な記憶となつて蘇ってくる。あの時は一艦長としては抜群の戦術眼とリーダーシップを持った少年……それでも、ラインハルトの能力を正確に評価できた点で、ベンドリングは自らに希少価値を主張しているのだが……としてしか評価していなかったのだ。

ラインハルトはその後数年で上級大将にまで上り詰め、ブルース・アッシュビーやリン・パオにも匹敵するか、あるいはそれ以上の艦隊指揮能力を証明した。帝国軍元帥となり、例えば艦隊総司令長官の地位を得た場合、彼は帝国の戦略そのものを左右できるだけの権限を手に入れることになる。それが具体的にどのような形で現れてくるのか、そこまではベンドリングの視野の外ではあつたにしても、同盟と帝国との戦いの形相がこれまでとは一変

するに違いないことだけは確かだった。

「……ミューゼル大佐、いえローエングラム伯はどこで戦おうとするでしょうか？」

「そんなこと、分かるわけないでしょう、今の私に」

グレーチェンは肩を竦めるようにして、緩くカールした淡い色の金髪を左右に揺らせる。

「私は起こったことの分析はできるけど、この先、何が起きるかなんて予言はできない。できればいいな、とは思っけれど。だから、できるだけ早く前へ進みたい。あの者が宇宙を席卷してしまふ前に」

最後の一フレーズを帝国公用語で言い切り、グレーチェンは笑いを収めた。

「今年も生きの良いのが来ている」

控え室に入った時、先に着いていた一人が書類を繰りながら声をかけてくるのに、ウランフは眉を顰めた。宇宙暦七九六年二月中旬。同盟軍士官学校七九六年度入学志願者の面接試験会場である。

士官学校の試験は、一次の学力試験で始まる。これは一般の大学理系学科に準じる内容の純然たるペーパー試験である。宇宙での戦闘をその任とする同盟軍士官の卵を集めるのであるから、同盟の大部分の高等教育機関にも劣らない高い水準を要求する中身になっている。

二次試験は、他の大学にはない体力検査がその主体となる。身体検査と基礎体力の測定に始まり、軽装備での模擬戦闘行軍までを含んだハードな内容であり、一次試験をパスした学生も、その多くがこの時点で篩にかけられてこぼれ落ちて行かざるを得ない。

どちらかといえば海軍の系譜を引く同盟軍だったが、太古の海軍でも、体力のないひよるひよるした若者を士官に仕立て上げるほどの親切さは持ち合わせていなかったはずだった。

無論、何事にも例外があるもので、何年か前に受験した生徒の一人が行軍の途中で行方不明になるといふ事件が実際に起こっている。

この話にはオチがあつて、さすがに受験生を試験で遭難死させては拙いと捜索隊を出したところ、翌日になって件の受験生が自分の足でゴール地点へたどり着いた、というものだ。異論は出たものの、受験要領には制限時間の記載はなかったことと、自力で目的地に達していることから合格の水準は満たしていると判断されたのだという。ちなみに、その受験者の名前はヤン・ウエンリーという。

若くして英雄としてもはやされるようになった人物にありがちな一種の伝説ではないかと思つていたウランフだったが、士官学校の関係者が否定しないところを見ると、あるいは事実だったのかも知れないと思つようになっていく。

二次試験をパスすれば、生粋の同盟出身者には士官学校の門が開く。門が開いたからといって、四年後にすんなりと出て行けるとは限らないが、とにかく同盟軍の士官への道は開かれる。

一種の第三次試験である面接試験。それは、『生粋』でない、つまり生まれつきの祖国を同盟と異にしている者。言葉を飾らずに言えば、亡命者のみ課せられたハードルだった。曰く、『同盟軍組織において士官はその下僚、および同僚に対して生死を分かち判断と指示の任を負う存在である。生死勝敗の岐所において、判断結果の速やかなる言語化が士官にとって絶対に欠くべからざる資質であることは言うを俟たない。同盟公用語を母国語とせざる者に、同盟公用語に対して十分以上の能力の証明を求めるのは蓋

し当然であろう。』

「実のところ、ウランフはそつは思わない。『同盟公用語に対して十分以上の能力』とやらを持たない者が、第一次、第二次の試験を突破できるはずもない。むしろ、いわゆる『生粋』の同盟出身者にこそ、言語能力に対する十分の審査が必要ではないか、そう思われる事例の方が最近では多い。偽らざる、実戦指揮官としての率直な感想だった。」

第三次ティアマト宙域会戦でのホーランドといい、アスターテ会戦でのムーアやパストレーレなど、高級指揮官になるほど、自らの判断結果だけではなく、その結果の正当性を他者に納得させる能力や、正当な戦術上の判断を下す力量に欠落を生じやすくなっているのは一体どうしたことだろうか。

そんな思いとは別に、ウランフは控え室のテーブルの上に置かれた書類に視線を落としている。その第二次試験の試験官として、彼はこれから半日ほどを一〇名余りの亡命者出身志願者の面接に時を費やさなければならなかった。書類には志願者の写真とプロフィールのみが載せられ、その他の記載はない。面接官に予断や偏見を与えぬための配慮だったのだが。

「どうして生きがよいのが来ていると分かるのだ？」

声をかけてきた面接官に应じるウランフの声がやや尖って響いた。その面接官が手にしている書類は、明らかにウランフのそれと厚さが異なっている。本来、面接官には回ってこないはずの一次、二次試験の成績や、志願者の身許調査結果だろう。それがウランフの推測であり、どうやらそれは凶星であるらしかった。

「まあ、そうかりかりしないで頂きたいですな、ウランフ提督。三〇分くらいの面接で、人物が分かるわけでもないし、それならできる限りできの良いのに良い評価を与えられるように準備しておくのが面接官としての義務ではありませんか」

「確かに亡命者出身者が任官後に問題を起こした事例はなしとはしない。しかし、同盟出身者にしても問題を起こす時は起こすものだ。たとえ、戦術研究科の首席出身者であったとしてもだ」

ウランフの言葉に微かな苦渋が混じるのは、つい先日のアスターテで同盟軍が喫した大敗北とは無縁ではない。口ポス元帥は無能ではないとウランフは思っているが、その口ポスの指揮下に、ここ一年ほどの間に軍事的なバランスが急激に帝国サイドに傾きつつある。第六次イゼルローン要塞攻略戦では、士官学校始まって以来の秀才を謳われたマルコム・ワイドボーンが戦死した他、終局では帝国艦隊の狡猾な動きの前にトゥール・ハンマーの前面に誘い出されるといふ決定的な失敗を演じている。第三次ティアマト宙域会戦では五個艦隊の内、二個艦隊が戦場に間に合わないという動員レベルでの失態が起きている。会戦では第一艦隊が司令官ホーランド以下の艦隊首脳が全滅する大打撃を受けて崩壊。そして、今回のアスターテである。帝国艦隊がアスターテ星系深くに無造作に踏み込んできたのを察知した口ポスの幕僚達は、ダゴン戦の再来とばかりに、まずは帝国軍を逃がさぬことを最優先に作戦を立案した。結果は、パストレーレ、ムーアの二司令官が戦死、二万隻以上の艦艇と二〇〇万を超える将兵が永久に失われる大敗北だった。

偏見だとは思っているのだが、いずれも、アンドリュー・フォークなる人物を口ポスが作戦課専任参謀として重用するようになって以来のことで、思えてならないのだ。ウランフは、フォークの、どこか昏く歪みを帯びたような容貌を思い出すに付け、試験成績の優秀者・イコール・優秀者という凶式には一步を留保したくなる。

「いずれも二次試験まで合格してきている。成績の上では十分だ。あとは極端に言葉に不自由があるか、あるいは人物に問題がある

かしない限りは、二次試験までの成績には拘るべきではないし、もともと面接官がそうした情報に事前に接するのは禁じられてはいるはずだが？」

「それは慣習としてそうなっているだけです、ウランフ提督」

ウランフに非好意的な視線を突き込まれても、件の面接官は顔色一つ変えなかった。

「それに、慣習というなら、こうした情報を仕入れておくのも慣習です。成績優秀者に低い評価を与えて、後々クレームを付けられてはたまらない」

「クレームだって？」

「いや、ウランフ提督は聞いておられない？」

したり顔の面接官の表情から、ウランフはやつと彼の名を思い出した。ジョージ・ロックウエル少将。後方勤務本部の若手軍事官僚だが、実戦では文字通りに役人的で、『頭の固い』対応が多いために、前線指揮官の間での評価は最低と言っている。本人もそれを意識しているのか、とかく政治的な動きが多く、それがかえって彼への評価を下げる要因となっている。無論、本人にとつては軍と政府の上層部の評価以外にはさして関心はないだろうが。

もう一人の面接官。E式の名前の所有者によく見られる穏やかな顔立ちの准将についてはウランフは余り面識がない。ウランフが入ってきた時、食べかけていたサンドイッチを上着のポケットに突っ込んで敬礼に立ち上がったのが印象に残った程度だった。

「何をだ、ロックウエル少将？」

亡命者出身者から最低一名は、この面接試験で落とすことになっている。一次、二次試験での最優秀者は兎も角、それに次ぐようなレベルの志願者を取って不合格にすることで、亡命者に対する選抜基準の厳しさを示すことになっているのだ……得々として解説するロックウエルに、ウランフは嫌忌の表情を向けた。

「下らないな。同盟は自由の国ではなかったのか。亡命者というだけで、そのような差別を受ける謂われはあるまい」

「自由の国であるからでしょう、提督。一言で自由とはいえ、それは時に国家への反逆思想を信じる自由とも誤解されかねないわけですから。特に、亡命者は、場合によってはほんの数年前までは『皇帝万歳』と唱えていた輩です。そうした連中に、面従腹背は通じないことを思い知らせ、併せて自由の意味をはき違えている連中に警告を与える。これは決して下らないことではありません」

「それ以上の議論を交わす意志はウランフにはなかった。」

「貴官の基準には興味はない。私は正規に提示された基準以外で志願者を見るつもりはない。隠れた基準があるというのなら、貴官だけが勝手に従えばいいことだ」

言い放った時、面接の始まりを告げる係官の声が彼らの元に届いた。

最後の一人に至るまでの十名余りは、ウランフの基準から言えば、可もなく不可もなしといったところだった。ロックウエルの言うような、『面従腹背』な輩も見受けられなかったし、さりとて昨年度首席合格を果たしたクリストフ・ディツケルのような人物もいない。それが素直な感想だった。ロックウエルや、もう一人の面接官からの質問も当たり障りのないもので、一体、ロックウエルが誰に『自由の意味をはき違えている連中への警告』を与えるつもりなのか、見当も付かなかった。無論、ウランフにはロックウエルの意図などを意に介する意志は全くないが。

「この会場では最終の被面接者になります」
係官の声が単調に告げる。ロックウエルともう一人の面上にも

心なしかほつとしたような色が浮かぶ。休憩時間を入れて五時間近くになってみれば、ウランフとて退屈な義務から解き放たれる微かな安堵感を彼らと共有するのにやぶさかではないと言つものである。

が

面接者がドアから姿を現すと同時に、机の上を滑らされてきたメモに、ウランフは大きく顔をしかめた。

「次が不合格予定者です」

よほど険しい形相になっていたのかも知れない。視線を振り向けた先で、ロックウエルの無表情な顔が慌てたように正面を向いた。実際、最初の質問が面接の開始を告げていなければ、ウランフは立ち上がってロックウエルに詰め寄っているところだった。

「氏名、生年月日は

？」

「グレーチェン・ヘルクスハイム。宇宙暦七八一年二月二日生まれです」

大人というにはまだ十分に幼く、子供と言つには制御の行き届いた声がウランフの注意を被面接者に引き戻した。

「生年月日を、いわゆる(道ばたに盛り上がっている犬の排泄物を表現する形容詞)な帝国暦で言つとどうなるかね」

普通、公式な席では決して使われないはずの表現を交えた質問に、被面接者が眉を顰めたように見えた。明らかな驚きと、そして嫌悪。彼女が、ロックウエルの使った俗語を完全に理解した表徴サインだった。

「帝国暦ですと四七二年になります、閣下」サー・アンドリュウ・ヒル

「どうして私が閣下だと分かるのかね、フロイライン・ヘルクスハイマー」

「襟章から拝察するに、閣下は少将でいらつしやいます」

被面接者……グレーチェンはは応じる。同盟軍では准将以上の

階級の方を閣下と呼ぶ規則になっていると聞いています。

「なかなかよく勉強してきているようだな」

ロックウエルの表情が僅かに鼻白んだ。

「同盟軍に志願する以上、軍の制度を学ぶのは当然のことと考えます。それと、閣下、私の名は、ヘルクスハイマーではありません」

「上官に対しては絶対服従が軍における絶対的な原則であることまでは学ばなかったのか、フロイライン」

紫水晶色の目が強い光を帯びて、ロックウエル、それからもう一人の面接官、さらにウランフの面上を通り過ぎた。やや厚めな唇の端が微かに動くと、それまでの無表情さが勝ち気さの優ったそれに取って代わられる。半瞬の間、挑むような凝視をロックウエルに突き刺した後、グレーチェンは静かに頷いた。

「学びました」

「宜しい」

ロックウエルが唇の端をつり上げるのが、ウランフにはネズミをいたぶる性悪な猫の表情に見えた。

「(知能障害を持つ人々に対する侮辱的な形容表現)な帝国は、あの(犬の母子の関係を諷した決定的な攻撃的表現)であるところのルドルフの創り上げた、言ってみれば(今度は牛の排泄物を使った軽蔑表現)篡奪国家に他ならない。言い換えれば、平和と自由と民主主義の敵である。全人類の敵であり、文明と文化を踏みにじる醜悪で(性的な行為に類する単語を用いた侮蔑的形容詞)な利己主義者たちの建てた擬似的国家が銀河帝国を僭称していると言つべきである」

これはフェアではない。ウランフは呆れた。帝国からの亡命者の、それもこともあろうに一五歳の少女に向かって、公共の放送は無論のこと、地位のある……つまりロックウエルをも含め

てだが……人物がそうした言葉を使っただけでもスキャンダルになりかねない用語を並べ立てて、士官学校の面接試験の質問を放つというのでは、余りにも意図があらさま過ぎる。かつ、このような質問を用意し、さらに実際に使うというのはロックウエルの為人すら再検証に値するとの印象を周囲に与えても文句は言えないだろう。

直ぐ脇の、そうした批判の視線にはまるで気づいていないらしい。ロックウエルは続けた。

「人類の希望であり、未来そのものである自由惑星同盟を蹂躪しようと、虎視眈々と狙っている、この悪の巢窟たる(近親相姦的な用語を用いた、悪罵に近い形容表現)な帝国を打倒し、宇宙に永久の平穏をもたらすことが、我々に課せられた神聖な義務である」

思い入れ宜しく、ロックウエルの視線がさらに嗜虐性をままして、哀れな……おそらくはロックウエルの言葉の三分の一も理解できなかつたに違いない……亡命者の少女を見下ろした。

「この点について君の意見を聞かせてもらおう」

「銀河帝国が、ルドルフ・フォン・ゴルデンバウムによる銀河連邦からの政権篡奪によって成立した点は議論の余地がありません。従って、篡奪を受けた政体に所属していた人々が、篡奪の結果として成立した国家組織に対して非常な憎悪を抱くのは至極当然と考えます。また、帝国が自由惑星同盟を打倒して、その領域を併合し、すべての人類を帝国の支配下に置こうと志していることも事実だと考えます。ですから、自由惑星同盟が帝国を不倶戴天の敵と見なして、この打倒を国家の目的に置くこと、その目的の許に同盟軍を組織し、国家に奉仕すべき軍人を養成し、帝国との戦いを継続するのはまったく当然の行為だと考えます」

少女らしい、柔らかい色調の唇が紡ぎ出した言葉がロックウエルの表情から動きを奪った。彼の予想では、グレーチエンは問わ

れた内容を理解できず、戸惑いと焦りの中で沈黙に陥るはずだったのだろう。

グレーチエンは微笑とも言えない微笑を浮かべた。

「私は帝国では生きられない身の上です。帝国を敵と見なして、これを戦う場に我が身を置くのは、私自身の出身や境遇と何にも矛盾することはありません」

言葉を切り、再び紫水晶色の視線が三人の面接官の顔を順々に経巡っていく。それ以上の質問がないのをいぶかしがるかのような仕草に見えた。

「え、あ、いや、つまり……」

咽喉に絡まった何かを吹っ切るようにロックウエルが言いかける。

「では、私から質問をしよう」

ウランフは割り込んだ。ロックウエルの非難がましい視線は一切を無視することにする。

「士官学校を志願する以上、士官学校のこととは十分勉強してきただろうな？」

「はい。できる限りのことは学んだと思っています」

「被面接者の控え室は一階にあつたはずだが、ここへ上がってくるまでの階段は何段あつた？」

「は……？」

一五歳という年齢が信じられないほどにきつく引き締まっていたグレーチエンの表情が一気に緩んだ。目がまん丸に見開かれ、狼狽えた様子の瞳がうるうると答を求めて動き始める。一五歳……というよりもティーン・エイジャーになつたばかりの少女本来の表情に、ウランフは思わず笑いを押し殺して追い打ちをかける。

「おい、どうした。十分に勉強してきたのではないのか？」

「え……あの……申し訳ありません、分かりません！」

「分からないか」

「ウランフ提督……一体……？」

「貴官はもう十分に質問をしたはずだぞ、少将」

「しかし……」

ロックウエルをウランフは無視した。

「では、もう一つ聞いてもいいか？」

「はい」

再びグレイチェンの表情が厳しく引き締まる。

「命中率一〇〇パーセントの主砲を備えた戦艦一隻と、命中率一パーセントの主砲を備えた巡航艦一〇〇隻がある。撃ち合った時、どちらが勝つ？」

グレイチェンは一瞬だけ黙り込んだが、素早い瞳の動きが彼女の頭の中で回答が紡ぎ出ししているのを物語って余りあった。

「……巡航艦です。戦艦は一〇〇隻の巡航艦をすべて沈めるのに、少なくとも一〇〇回の斉射を必要とします。巡航艦は最初の数斉射の間一斉射ごとに、一隻分の命中を戦艦に与え続けることができます。どんな戦艦でも、この戦いに勝つことはできません」

「宜しい……で、先ほどの少将からの質問内容について、何かコメントすることはあるか？」

紫水晶の眸が、不機嫌に彼女とウランフの間に視線を往復させているロックウエルの表情を薙ぎ、それからウランフへ戻ってくる。

「……宜しいのでしょうか？」

「何でも言ってみるが良い」

「ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムは犬の子供ではありませんし、帝国は人ではありませんから、人を表する言葉で形容するのは不適切だと考えます。また、排泄物や性的関係を意味する言葉

は、国家や人の属性を示すには不適切なものだと思えますし、情報を伝える上で無用に言葉が長くなりすぎるくらいがあります。敢えて、そのような表現をお使いになったのは、このような表現が同盟軍では普通であるから、と考えても宜しいのでしょうか？」

ロックウエルが小さく呻き、その頬から耳朶に見る見る血の色が上ってくるのは、別に羞恥ではない。面接官として、（不合格予定者となっている）被面接者を弄ぶつもりで口にした一連の俗語を、彼女が悉く理解していた事実を面前に突きつけられた怒りだっただろう。

ウランフは一瞬、グレイチェン・ヘルクスハイムなる少女が、これからの同盟軍士官として直面するだろう困難を思いやったが、直ぐに頭を切り換える。上からは『可愛い気のない小娘』と嫌われるだろうが、苛烈すぎる帝国との戦いの中で生き延び、ウランフと肩を並べている同僚達の多くが、いずれも『可愛い気』とはおよそ縁のない連中であることに思い当たったのだ。ウランフ自身しかり、ポロディンしかり、おそらくは第五艦隊司令官のビュッコク中将もそうだっただろう。

この少女、グレイチェンは同盟軍士官としての道を選び取るうとしていく。その中で将来を切り開いて行く上で、ロックウエルのような上官とは必ず出会うことになる。今、ウランフにできるのは、今、彼女の前に立ち塞がっている障碍を取り除いてやることだけだ。彼女の将来は彼女自身のもの。ウランフが案じるべきことでもなく、案じたところで何かができるといふものではない。また、何かをしたところで、それがグレイチェン・ヘルクスハイムにとってプラスになるのか、負債となるのかも分かりはしないのだ。

「余分な形容詞は情報の伝達を遅らせ、意味を曖昧にする。ただ、軍務以外の場所では結構耳にすることになるだろう」

もう一人の面接官に視線を走らせたが、彼は首を左右に振ることで無言の質問に応じた。

「では」

本来ならここで面接は終了のはずだった。ウランフもそのつもりで口を切ったのだが、この時、偶然のようにグレーチェン・ヘルクスハイムの経歴を記した書類の一端が視界に入ったのだ。

「では　もう一つだけ、質問、というか話題にしたいことがある」

「提督……」

ロックウエルの声が非難を含むが、ウランフは非好意的な一瞥で黙らせた。

「ラインハルト・フォン・ミューゼルなる帝国軍人によって追撃され、またその黙認によつて我が国へ亡命できた。そうだな？」

「その通りです。ラインハルト・フォン・ミューゼルは、今の上級大将ローエンングラム伯爵です」

「そのローエンングラム伯だが、既に元帥に昇進したらしい」

「そうですね……もう、元帥に……」

声と表情が僅かながら懐古と懐旧の響きを帯びるのを、ウランフは聞き逃さなかった。

「ローエンングラム伯、というか、当時はミューゼル大佐か。ミューゼル大佐は、君の父であるヘルクスハイマー伯爵が帝国から持ち出した私財を没収しなかった。無論、亡命に際して規定の納税は強いられたはずだが、それでも帝国伯爵家の資産だ。何も軍士官に職を求めずとも、その資産を元に安楽に暮らす道はあったはずだと思いませんか？」

「そうした選択肢もあると、後見人には言われました。同盟に貢献するならば、資産の一部を寄付するなどの手段もあると」

「そうしなかったのは、このミューゼル大佐、あるいはローエン

ングラム伯と何か関係があるのか？」

「それは……」

初めて、グレーチェンの視線がぶれて下に落ちた。何かを躊躇うように大きく肩を動かしてから、再び視線を真っ直ぐに上げる。

「あの者、いいえ、ローエンングラム伯が必ず帝国を一変させるに違いないと考えたのです。彼が帝国を変えてしまう時、私は彼と戦場で戦える立場にいたいと思いました。それが志願の理由です」

「変える……とは？」

「ローエンングラム伯による帝国の篡奪です」

調子外れの笑い声が割って入り、室内に張りつめかけていた空気を一度に破る。笑い出したのはロックウエル少将だった。

「何を馬鹿な。ここは神聖な試験会場だ。与太話をするところじゃないぞ」

「……ローエンングラム伯による篡奪？」

ウランフは、しかし、もう一度ロックウエルを無視した。無視されたロックウエルの表情が更に赤黒さを増し、灼き殺しそうな視線でウランフを睨み付ける。が、ウランフは気にしなかった。

「どのようにして？」

「ローエンングラム伯は優れた軍人です。帝国では軍人の力が殊の外強いですから、軍で実権を握れば、政治を奪う手段は十分にあるかと思えます」

「たとえば、クーデターか？」

「ちよつと違うかも知れませんが。ローエンングラム伯は身分の低い出自です。彼が栄達すれば伝統的な門地を持った貴族が反発します。彼らを挑発して先に手を出させ、それを鎮圧するという名目で皇帝からの勅命を得る。そんなやり方を取るのではないかと、そんな気がします」

グレイチェンの言葉はウランフを驚かせた。

「どうしてそう思うのだ？」

「少し歴史を学びました。地球時代の例ですけれど、独裁者の暗殺で軍政権が倒れた際、後継者の一人はこれで世の中が一変するとして、政治に不満を抱いていたグループに資金を与えて煽動しました。大暴動が起きたのですが、彼はその大暴動を鎮圧する司令官に任命され、そのまま次の独裁者になりました。また、慢性的な戦争状態が続いている時、主戦派が敢えて平和を唱えて、和平派に和平交渉を行わせて失敗させ、より強硬な主戦派の政府を作る、などというの普通に行われていました」

「ふむ」

「ですから、本当の実力者は最初に相手に手を出させて、それを抑え込むことで最後に実権を握る。ローエングラム伯もこうした歴史に学ぶのではないかと……」

「ローエングラム伯による、帝国の篡奪か……」

いつまでそんな話しをしているのだ、ここは面接の場であって、政治の話をする場所ではないぞ……再びロックウエルが声を上げかけるが、もはやウランフは意にも介さなかった。

「良かるう。君への面接はこれで終わりだ。長時間、ご苦勞だった」

「ありがとうございました、閣下」

「退出して宜しい」

グレイチェンは立ち上がり、まだぎこちない手つきで敬礼する。ウランフともう一人の面接官、そしてこちらはししぶしぶながらのロックウエルの答礼を受け、グレイチェンの淡い金髪が鮮やかに翻り、ドアの向こうへ消えた。

グレイチェンの許に同盟軍士官学校への入学許可通知が届いたのは二月末。

「宇宙でローエングラム伯と相見^{まみ}える、などと言ってみても容易いことではなさそうだな、ヴェンツェル・ハイブリッヒ」
入学許可の通知書を前に、グレイチェンが漏らした感想がそれだった。

「じゃあ、止めれば良いんですよ、グレートヒエン」

士官学校は全寮制です。あなたがおられなくなると身辺が寂しくなりますから、士官学校への入学を取り下げられるのは歓迎です。

ベンドリングの顔を、グレイチェンはたっぷり一分間、しかも面で睨み据えた後、たった一言だけ反論した。

「意地悪！」

一片の紙片に過ぎない許可証だったが、その裏にはグレイチェンには伺い知れない裏の事情というものが存在する。

入学許可に際しては、面接に立ち会ったウランフとロックウエルの間で激しい意見の対立があった。ロックウエルは、『不合格予定者』であるグレイチェンの合格は慣例により認められないとの立場に固執し、ウランフは彼女が士官候補生に十分な語学力を併せ持っている点と、『不合格予定者』なる慣例が不合理極まりない点を主張した。

「小官の質問に対し、回答可能な質問には間髪を入れずに応答し、通常回答に至り得ないような質問には潔く回答不可能であると応じた。かつ、帝国の状況に関する識見は一五歳の若者としては得難いレベルに達していると、小官は確信する」

ロックウエル少将にとって甚だ意外で、かつ心外極まりないことには、面接ではほとんど質問の声を上げなかった、チュン・ウィ・チェン准将なる第三の面接官がウランフを支持したこと

だった。

軍の慣例を無視するのか、といきり立つロックウエルだったが、第三の面接官に『神聖たるべき入学試験会場で、低劣極まりない俗語を連発するのも慣例に反していますな』と反論されては再「反駁の言葉を飲み込むしかなかった。

こうして、グレーチェン・ヘルクスハイムは晴れて同盟軍士官への道を歩み始めたのだが、その道が平坦ならざるものになることは、間もなく明らかになった。

グレーチェンにとって士官学校合格の恩人たるウランフを含め、同盟軍は、彼女が士官学校の門をくぐって半年も経たない七月末から八月にかけ、イゼルローン要塞に向けて、そのほとんどが二度と帰れぬ征旅へと旅立っていったのである。その先に待ち受けていたのは、同盟軍を破滅への一本道へ導くことになった帝国領侵攻作戦と、その結末となるアムリッツア宙域の会戦だった。